

豊野中学校における防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立豊野中学校

1 はじめに

長野市の北部に位置する豊野中学校は、創立 67 周年を迎えた生徒数 男子 144 名・女子 107 名、計 251 名の中学校である。豊野町は戸隠山麓を源とする鳥居川が町の東西を二分して流れ、飯縄山山中から流れ出る浅川が南部を縦断して千曲川に合流していく。郊外はりんごやぶどうの生産が盛んに行われている。豊かな自然に囲まれている豊野町だが、上記にある鳥居川・浅川・千曲川に囲まれているので、昔から水害とは切り離せない環境にある。4 年前の令和元年 10 月の台風 19 号の水害で豊野町はもちろん、豊野中学校も大きな被害を受けた。水害に遭った家庭の生徒は安全な場所に避難しながらの通学を強いられた。豊野中学校は仮設校舎での日々を過ごしながらか、令和 3 年に校舎改修を終了し、現在に至る。

2 長野市立豊野中学校の防災体制について

台風 19 号の被害後、当時勤務していた職員を中心にした自校の危機管理マニュアルの確認や、アップデートすべき部分について見直しを図った。その後、コロナ禍があげた令和 3 年度から、豊野三校（豊野西小・豊野東小・豊野中）が連携した防災教育の充実を位置づけ、取組を始め、今年で 4 年目になった。

令和 3 年度には、集中豪雨・土砂災害などに起因する洪水予測に際し、事前に保護者と確認した下校方法で下校させ、必要な生徒について迎への保護者に引渡すまでの安全確保と指導の一切を確認するねらいの基に初めての「引渡し訓練」を行った（準備として、タグとして首にかけられるような引渡しカードの作成・一次避難、二次避難の十分な説明など）。また避難訓練だけで終わらないように、10 月の防災月間に合わせた学年毎の防災学習を行っている（現在も継続中）。初めて行ったこの年の反省は、保護者への引渡しに時間がかかりすぎてしまったことであつた。

令和 4 年度から豊野三校合同引渡し訓練を実施。安全、確実に引渡し者に渡すことを第一に行った。廣内先生（防災アドバイザー：信州大学廣内教授）にも実際に訓練を見ていただきアドバイスをいただいた。「複数のお子さんをもつ家庭がどのような順番で学校に引き取りに来るのがより安全か」「確実に重んじたことによって生じた引渡し時間の超過」が課題に挙がった。

廣内先生には 1 月の避難訓練においても、地震に関しての講演をしていただき、生徒・教員の地震に対する知識や関心を高めていただいた。

令和 5 年度は「確実に」はもちろん、「速さ」も重点に計画を立てた。校内タイムライ

ンや三校共有のトリガーの見直しを図った。また、迅速に行えるように、入口を2つにして人の出入りの集中を防いだり、保護者だけでも行動できるような案内板・コーンスタンド・順路などの表示を配置したりするなどの工夫をした。速さについて効果があったのは、2つの小学校と同じように保護者が当該生徒の教室へ生徒を迎えに行くことだった。小学校と同じように保護者が行動できることは、保護者、生徒両者に「訓練と同じように動けばいいのだ」という安心を与えることにも繋がるのだと感じた。同時に、時と場合に応じた適切な行動ができるやり方を変えた訓練の必要性も感じた。

3 今年度の引渡し訓練

昨年度の課題を受けて、8月29日に三校合同引渡し訓練を行った（今年度は三校の近隣の幼稚園、保育園も避難訓練を行った）。

(1) 準備

- ・引渡しカードの記載内容について、必要に応じて保護者と確認し、確定
- ・引渡しチェックカードの内容に二次避難先を追加

(2) 工夫点

ア 引渡し実施前の時間の過ごし方

- ・引渡し実施前の20分を使って、川の防災について全校で個人用PCを使いながら調べ学習を行った。引渡し基準の「富竹1.8m」の水位がどれだけのものなのか、また住んでいる地域の川の様子や上流の川の様子の調べ方を確認した。生徒たちは自主的に身近な地域から長野県全域、全国の川を調べていくことができていた。生徒たちが自分で今の状況を正確につかむための方法の一つになったのではと感じている。今まで扱ってこなかった、一斉で行う情報収集を訓練に取り入れていくことも大切なのではないだろうか。



イ 待機生徒が少なくなったら体制の縮小を

- ・各学級に待機している生徒数を確認しつつ、1クラスに集約できる場合は体制を縮小する。



教室前での引渡し



4 学校防災アドバイザーの関わり

今回の三校合同引渡し訓練に対していただいたアドバイスは以下の通り。

信州大学 廣内教授からの御指導

- ・全体的に慣れてきてスムーズになった。しかし、先が見えている故に生徒が全員帰宅したところをゴールとしているように見える。本番はそこで終わりではなく、そこからがさらに大切で大変な所。この先に何をすべきか考える必要がある。
- ・マニュアルを全員が見ていく必要がある。その図を把握した上で、ここからは自分たちはどう行動したらよいかを見通しながら行動するスタンスが必要。
- ・いかに人手を生み出していくのかを常に意識する。（待機教室の数を縮小するなど）
- ・駐車場への配慮（駐車範囲の表示など）が必要ではないか。
- ・待機生徒への指示はメンタルを考えながら、できるだけいつも通りに。
- ・自力下校した生徒の帰宅連絡はするべき。
- ・4月当初に配付した用紙については要検討。記載事項にあたっては、よく考えた上でサインができるように配慮しないといけない。

5 事業の成果及び今後の目標

(1) 事業の成果

廣内先生からは、学校防災アドバイザー事業がスタートしてから継続して本校を見ていただいている。本校の課題を見出し、変化をつかみアドバイスをいただいているおかげで、毎年防災教育を見直す機会を得ることができ、防災教育について少しずつブラッシュアップできている。また豊野地区三校の小中学校で、連携した保護者引渡し訓練を実施することによって、幼稚園や保育園へも連携が生まれている。豊野地区全体の防災教育の意識が高まっているように感じている。

豊野三校を廣内先生はじめ、内山先生、本間先生、一人ひとりの専門家の先生方が担当していただけていることで、防災教育を担当している教員も大変心強かった。また、きめ細やかなやりとりができ、防災とは何かということを古から最新の情報まで教えていただけた。この事業のおかげで防災の取組もより充実したと考えている。

(2) 今後の方向

廣内先生もおっしゃっていたが、本番は避難して終わりではなく、そこからがさらに大切で大変な所なので、この先に何をすべきか考える必要がある。今年行った訓練での反省を生かして、修正していこうと思う。

6 まとめ

本校の防災教育担当2年目となり、地域で起きた水害を風化させないためにはどうすればよいのか、昨年度とは違った訓練をするにはどうしたらよいのかが係としての課題だった。しかしそれを課題に挙げていながら形にすることができなかった。専門家の先生にアドバイスをいただきながら、せっかくの機会をもっと積極的に上手に活用していきたい。今後も是非継続的に御指導いただきたい。

（文責 教諭 花岡 精子）

学校安全総合支援事業の取組について

— 保育園・小学校・中学校と地域の連携・協働ですすめる防災学習 —

長野市立戸隠中学校

1 学校の概要

(1) 立地

長野市立戸隠中学校（東経 138 度 15 分 北緯 36 度 41 分 標高 843m）

(2) 世帯数と生徒数

ア 15 地区・世帯数 1,413

（「令和 6 年（2024 年）長野市町別人口及び世帯数 7 月 1 日現在」より）

イ 戸隠管内人口 2,999 人（男 1,484 人 女 1,515 人）

戸隠管内での年少人口（0～14 歳）189 人 6.3% 60 歳以上 1792 人 59.8%

（「長野市地区別年齢別人口 令和 6 年（2024 年）7 月 1 日現在」より）

ウ 戸隠中学校生徒数 36 名（男 28 名 女 8 名）

(3) その他

- ・戸隠地区は「ハザードマップ」（長野市総務部危機管理防災課 H30 年 3 月発行）で、多くの箇所で土砂災害警戒区域、特別警戒区域となっている。
- ・戸隠地区主要幹線道路のほとんどで、地滑りやがけ崩れの危険が顕在している。

2 戸隠中学校の防災体制について

- (1) 火災や地震に対する年間 3 回の避難訓練を行っている。また、冬期間は校内の敷地内に落雪の危険個所があるため、避難経路が変更になることの確認も行っている。
- (2) 近隣の戸隠小学校と連携し、ハザードマップならびにタイムライン等の学習、ならびに戸隠保育園・戸隠小学校とも合同で災害時における引渡し訓練を行っている。

3 学校防災アドバイザーの関わり

※戸隠小学校と合同で「タイムラインの学習」「合同引渡し訓練」を実施している。字幅の関係で、本紙面では「タイムラインの学習」を述べる。「引渡し訓練」については、戸隠小学校を参照。

(1) どのような支援を受けたいと考えたか

継続した学習を行い、生徒も災害に関する危機感が薄れてしまわないように、局地的大雨や長雨等の状況においての自分の行動を自分ごと、地区ごととしてとらえる必要があると考えた。

そこで、長野市総務部危機管理防災課防災対策官後藤孝氏をアドバイザーに迎え、中学校の生徒だけではなく、戸隠小学校 5・6 年児童、地域全体でタイムラインをもとに、災害時前後の行動について実際に演習を含めながら学んでいきたいと考えた。

また、子どもたちだけの課題ではないこともあり、当日は地域の方の参加を交え、防災に関わる地区懇談会も実施した。

災害発生時に、どのタイミングで、どのように行動すれば良いかを「マイ・タイムラインづくり」を通して考えたい。同じ地区に住む生徒や児童だけでなく地域の大人と共有し、地域防災に対しての意識の高揚を考え、戸隠住民自治協議会等の協力も得た。

(2) 学校として取り組んだ内容

ア 事前学習としての「マイ・タイムライン」

防災対策幹後藤氏から、まず「マイ・タイムライン」の記入できる部分を「家庭で記入してくる」ように指示があった。「家庭で記入する」ようにしたのは、不明な個所は保護者と確認するとともに、当日参加できない保護者にも、生徒（児童）が持ち帰った「マイ・タイムライン」を基に、もしも災害が起きたら（起きそうだったら）のシミュレーションを紙面で行ってもらう意図もあった。

生徒は、分からない部分は保護者に聞きながら記入し、それを基に当日を迎えた。

イ 防災について考える実施当日

最初、後藤氏から、土砂災害、水害等が起こるまでの事前の情報を得て対応することが大事なことだと話があった。その後、同じ地区の小・中学生、地域、保護者も加わり、地区毎11グループに分かれて、ハザードマップをもとに地区のマイ・タイムラインを作成した。自分で作成したマイ・タイムラインをもとに「どんな情報で、いつ避難するか」「どこに避難するか」を考え合った。

あるグループでは、児童・生徒が「インターネットで情報を調べて避難する」と話すと、地域の方からは「インターネットでは、広い情報はすぐにわかるけど、戸隠の状況はリアルタイムには出ない。インターネットよりも支所などの情報をもとにして行動してほしい」や「〇〇センターに避難する」との発言では、「避難場所（施設）は災害の状況によって、避難できるところとできないところがある。あの場所（施設）は洪水の時だけの避難場所ということもある。事前に調べておくことが大事」などの話が出ていた。また経験則から出る「あの沢が濁ってきたら、大洪水になる」など地元での災害の言い伝え（伝承）も大事にしたいと、文字に現れない防災につながる話も出た。

「マイ・タイムライン」は、災害発生時にどのような行動をとるかを事前に決めておくためのツールです。このシートは、災害発生時の行動を記録するためのものです。

マイ・タイムライン作成手順

1. ハザードマップを確認し、自分の住んでいる場所の危険度を把握する。

2. 家族の人数、年齢、性別、職業などを記入する。

3. 家族の健康状態、アレルギー、持病などを記入する。

4. 家族の持ち物、貴重品、現金などを記入する。

5. 家族の避難場所、避難経路、避難手段などを記入する。

6. 家族の連絡先、緊急連絡先、近所の人などを記入する。

7. 家族の防災意識、防災知識、防災訓練などを記入する。

8. 家族の防災グッズ、防災用品、防災道具などを記入する。

9. 家族の防災計画、防災目標、防災対策などを記入する。

10. 家族の防災意識、防災知識、防災訓練などを記入する。

【家庭で作成を行ったマイ・タイムライン】

「マイ・タイムライン」づくりの例

1. ハザードマップを確認し、自分の住んでいる場所の危険度を把握する。

2. 家族の人数、年齢、性別、職業などを記入する。

3. 家族の健康状態、アレルギー、持病などを記入する。

4. 家族の持ち物、貴重品、現金などを記入する。

5. 家族の避難場所、避難経路、避難手段などを記入する。

6. 家族の連絡先、緊急連絡先、近所の人などを記入する。

7. 家族の防災意識、防災知識、防災訓練などを記入する。

8. 家族の防災グッズ、防災用品、防災道具などを記入する。

9. 家族の防災計画、防災目標、防災対策などを記入する。

10. 家族の防災意識、防災知識、防災訓練などを記入する。

【地区に合わせてマイ・タイムラインを作成】



〔マイ・タイムラインを基に地区毎作成〕

生徒・児童は次のような振り返りを残している。

- ・今日の防災教育では、避難するタイミングやどういう状況になると危ないのかを地区の人と確認できてよかったです。避難場所が私の地区には3つあったけど、一番安全な場所が分かってよかった。（中1）
- ・普段生活する中で、ハザードマップを見てどこに避難するのか話し合う機会があまりないので、今回しっかり防災について見直せてよかった。また、地域の方の意見なども大切にしていきたいと思いました。（中2）
- ・小学生、保護者の方と話すことによって、今まで気づかなかった地域のことに気づくことができてよかった。避難するタイミングが大事だということも地域の方のお話でよく分かった。何か災害があったときには、迷わずに避難したい。（中3）
- ・生まれてからすごい災害がなくて、考えたことがあまりなかったけれど、もしも大きな災害が起きたらどうしようと考えておくのは大事だということが分かった。避難場所を見直すきっかけになってよかった。（5年）
- ・土砂災害が起きた時に、どこに逃げたらよいか、どんなタイミングで避難すればよいかが分かった。洪水などは起きないと思っているけど、起きた時のように準備ができてよかった。（6年）

ウ 地区懇談会

戸隠住民自治協議会、保護者そして長野市総務部危機管理防災課防災対策官 後藤孝氏を交えての地区懇談会を生徒（児童）下校後行った。そこでは、戸隠の現状や地形的な条件などを踏まえ、災害等が起きた時には「マイ・タイムライン」のシミュレーション学習を活かしながら、避難することの重要性が再認識された。地域の方からも「災害は起きてほしくないが、もし起きてしまったら、子どもたちを守り、高齢者を守っていきたい」「今回、子どもたちと一緒に勉強して、自分たちも地区を見直すいい機会になった」等の話も出ていた。

4 事業の成果及び今後の課題とまとめ

1年次の「防災マップの制作」「防災アプリの活用」、2年次の「マイ・タイムライン」からの避難場所等の確認等を通して、2年間で防災教育を深めてきた。地域と近隣の戸隠小学校が協働して2年継続して防災教育を行ったことは、今までどちらかというと他人ごとだった「災害」を、意識して自分ごととしてとらえることに繋がってきた。

今後も今回実施してきたものを糧に、定期的な防災教育を実施していきたいと考えている。

（文責 教諭 宮下 慎一郎）

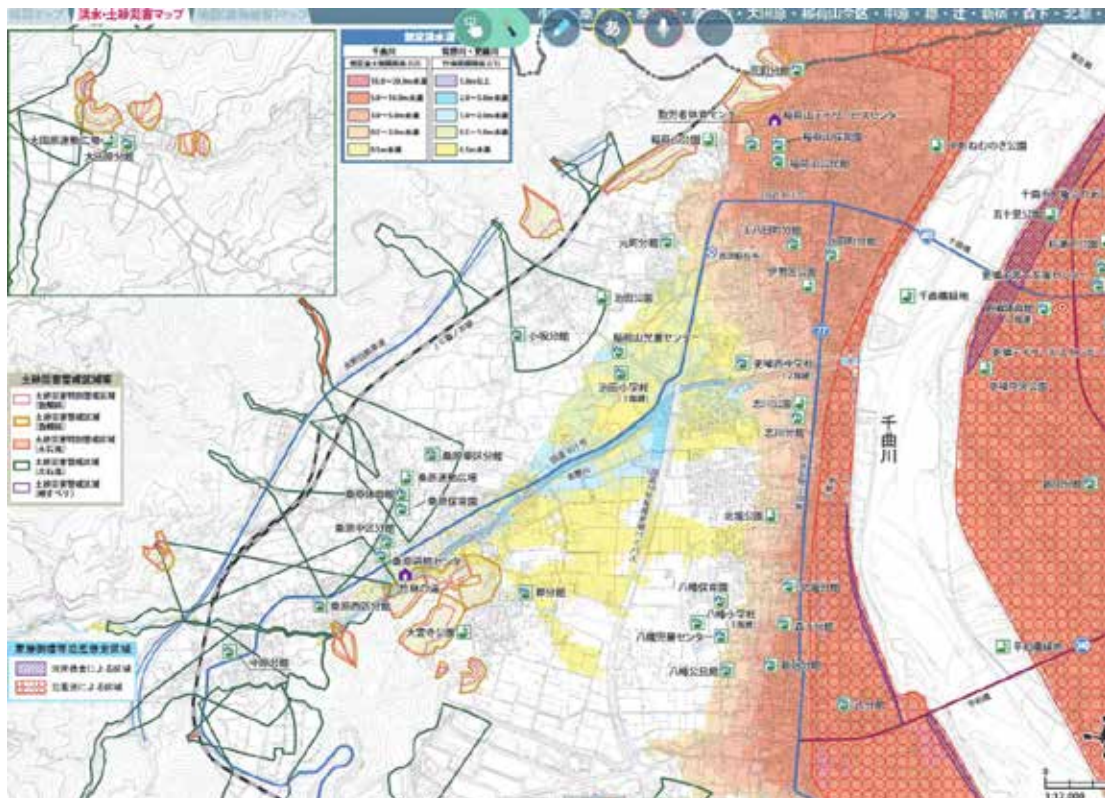
防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取組について

千曲市立更埴西中学校

1 はじめに

本校は、千曲市西部にあり、千曲川の左岸に位置する。2019 年台風 19 号災害では、本校学区である野高場地区をはじめ、浸水の危険性が高まり、本校生徒の中にも、小学校中学年時に本校や近隣の小学校に避難をした経験をもつものもいる。

本校の学区である野高場地区や八幡地区は、千曲川堤防沿いに多くの住宅が立地する地域であり、令和 3 年 4 月作成の千曲市ハザードマップでは全域で氾濫流による家屋倒壊が想定されている。想定浸水深も 5 m～10m が予測されている。また、稲荷山地区は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、歴史ある建造物が林立する地域である。そのため、洪水災害に加えて地震災害発生時にも、多大な被害が予想されている。また、桑原地区をはじめとする山手の地区は、土砂災害の危険が大きな地域である。このように、地区によって異なる災害リスクを抱えた地域である。そのため、防災教育を進める意義が大きな地域であるといえる。



2 本年度の取組について

(1) 防災士による令和元年度台風 19 号災害の実際の様子の講演会及び避難所開設体験

① ねらい

台風 19 号災害の被害の実際を防災士の方のお話から知るとともに、避難所開設に関する作業を体験することを通して、実際の災害時における避難所の状況や活用方法、自分たちにできること等を知る。

② 活動日 令和 6 年 10 月から 11 月 （講演会 11 月 15 日）

③ 参加者 1 学年 80 名

④ 活動の概要

- ・事前学習として、台風 19 号災害のニュース映像や自分たちの避難体験等を共有することで被害の大きさを確認するとともに、千曲市ハザードマップで被災リスクの大きい地域であることを確認した。
- ・防災士（千曲市危機管理防災課職員）の講演をお聞きし、令和元年度台風 19 号災害における千曲市の被害の様子を知る。
- ・防災倉庫にある段ボールベッドや簡易タープを組み立てたり、避難所開設時に体育館に運びこまれる水や生活用品を確認したりすることで、避難所の様子を知るとともに、自分たちが避難する際にはどのような準備が必要か、どのようなことが問題になるかを考える。

⑤ 生徒の様子



⑥ アドバイザー（廣内先生）からの御助言

- ・防災士の方のお話に加えて災害デジタルアーカイブを利用することによって、より様々な角度から台風19号災害を知ることができるので、活用したい。

⑦ 生徒の感想より

- ・避難所のベッドなので、どういうものかあまり想像できませんでしたが、実際に作ってみると避難所にあるベッドと思うと意外にいいなと思いました。段ボールベッドなので普段私達が使っているベッドに比べると硬かったりしたけど簡単に作れるし壊れないという面で考えると良いのかなと思いました。今回の体験を基に、もし本当に私達が避難所に避難しなければいけない事態になったら役に立つので、活かして積極的にお手伝いをしようと思いました。
- ・避難所の様子はテレビでしか見たことがなかったのですが、体育館に実際に用意してくださったテントが20張りあると考えると、さらにイメージがつかえました。また、段ボールベッドを作ってみると、何度も繰り返し使えることに加え、何人乗っても潰れないなど、非常にサスティナブルだとも思いました。避難所を作っていくのは自分たちだと認識し、避難時には開設を積極的に手伝いたいと思いました。

(2) 「マイタイムラインをつくろう」

① ねらい

被災前後の「行動イメージ」をもつことの大切さを理解し、「マイタイムライン（被災前後）」を作成する。

② 活動日 令和6年10月29日

③ 参加者 1学年80名

④ 活動の概要

- ・千曲市防災ガイドブック掲載の「マイタイムライン（被災前）」を作成する。

(<https://www.city.chikuma.lg.jp/soshiki/kikikanribosai/bosai/4/908.html>)

- ・作成したマイタイムラインを共有し、工夫や課題について話し合う。
- ・能登半島地震における避難所生活のニュース映像を視聴し、被災時における生活の困難さをつかむとともに、被災後の「マイタイムライン」を作成する。
- ・授業のまとめと感想を記入し、お互いの意見を共有する。



⑤ 生徒の様子（生徒が作成したマイタイムライン）



⑥ アドバイザー（廣内先生）からの御助言

- ・防災教育は「1 年間で完結」ではなく、学年をまたぐ等、カリキュラムを整え継続して実施したい。
- ・実際にフィールドワークを通して、地域の様子を調査したい。観点なども生徒自身が決めだすとよりよいものになる。

⑦ 生徒の感想より

- ・台風 19 号災害のときは、非常食はあまり用意してなく家が水に浸かったときに、浸かったらまずいものを中心に二階に運ぶことでいっぱいいっぱいでした。けれど、今日作ったマイタイムラインを利用して、台風などが来たときにどのように行動すれば良いのか目標が立っていれば、その場になったときに困らないと思いました。
- ・もし災害が起こって避難しなければいけないということがあった時は、避難場所と、ある程度の災害グッズがあれば大丈夫と思っていたけれど、その大丈夫と思いつめるのは危険で、それに至るまでの流れをきちんと確認することが大切だと思いました。そうでないと、いざ行動するとなったとき、何から手をつけていいのか分からず、なかなか行動できないと思ったからです。

3 おわりに

今回の学習を通して、災害に対して事前準備をはじめとする能動的な準備・行動が大切であることを子どもたちが理解しており、一人ひとりの防災意識が高まった学習になったと感じている。子どもたちには、今回の学習を基に、防災に関心をもち、自分だけでなく家族や周りの人の命を守るために考え、行動できるようになってほしいと願っている。

（文責 教諭 町田 祐介）

学校安全総合支援事業の取組について

— 地域と連携した防災学習について —

安曇野市立穂高東中学校

1 はじめに

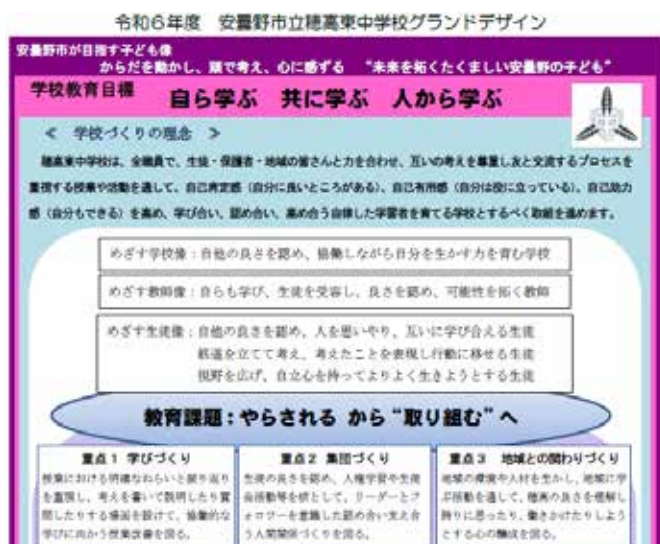
本校西側には北アルプスが連なっている。学区東側には犀川、穂高川を始めとする多数の河川が流れており、学区内にも北アルプスを源流とする複数の河川や堰があるが、安曇野市防災マップによると浸水や土砂災害の可能性は低いとされている。また、本校学区の東側には活断層の存在が指摘されており、「震度想定マップ」では、震度6弱が想定されている。加えて国の地震調査研究推進本部の調査によれば、安曇野市内を通る「糸魚川―静岡構造線断層帯」で起こるM 7.6 程度の地震発生率は、30 年以内に14%～30%とされている。

このような安曇野の自然環境に囲まれて、全18 学級（うち特別支援学級4 学級）、全校生徒438 名、職員47 名が学校教育活動を行っている。

2 「地域と連携した防災学習」の実施に向けて

本活動は平成29 年度より実施されてきた。新型コロナウイルス感染症による中断を経て令和4 年度より再開されている。学校グランドデザインの中の教育課題として、「やらされる から “取り組む” へ」がある。あらかじめ決まった活動を行う避難訓練から、主体的に考え関わり取り組める避難訓練へと変化させていくことが大切であると考えている。

これまでの、各地区の実情に合わせて各地区の区長の方が当日の計画案を立案していたが、昨年度より事前打ち合わせ会の際に各地区生徒会長生徒より「やってみたい活動、必要になりそうな活動」を提案する形式に変更している（地区生徒会長生徒への事前指導にて



令和6年度 穂高東中学校グランドデザイン
(一部抜粋)

作成)。この会で各地区の区長の方と各地区生徒会長生徒との協議を経て、当日の活動計画を作成することを通して、より生徒が主体的に取り組める活動に近づいている。また、地区生徒会長生徒だけでなく本校生徒一人一人の防災への意識や関心を高める目的で、「自宅から避難場所までの危険箇所」について考える時間を設けている。

3 令和6年度版 地域と連携した防災学習の実際

矢原	浸水想定地域の確認	西原・田中・上原	テントの設営、非常食の試食 防災クイズ
白金	川の氾濫、地震についての学習 非常食の試食	柏原	防災体制の説明 防災倉庫の見学 消火器訓練、非常食の試食
等々力区	防災倉庫の見学 消火器の使用方法 非常食の試食	柏矢町	消火器訓練、防災体制の説明 発電機の操作実施 折り畳みリヤカー組み立て
等々力町区	地域の方への防災インタビュー インタビューを受けての ポスターセッション	久保田	防災講話 防災食作り・試食 簡易トイレ見学、防災クイズ
穂高町区	災害学習 非常用担架の作成 段ボールベッドの作成	狐島	ハザードマップチェック 水害について、AR浸水体験 非常食の試食
本郷上下	消火器訓練 避難時の注意点確認 防災コップについて		

当日の様子



【実施後の生徒の感想】

- 今日のような機会をつくってくださった地域の方に感謝しなきゃいけないなと思った。多くの人に支えてもらって、応援してもらって今があると思う。時と場と状況に応じて動ける人になりたいし、周りの人の役にたてる人になりたいと思った。
- 災害が発生したとき、消防団の人や避難誘導してくれる人も全員被災者であることにかわりないから、自分は助けられる側という意識ではなく、自分にもできることを考えて行動するようにしたいと思う。慌てず落ち着いて、まずは自分や身近な人の安全を第一に考え、それから自分ができることを探して、地域の人と協力できる人でありたい。
- 県外で発生した火災の際、社会人や大学生ではなく、中学生が率先して火災の対応を行ったという話を聞いて、同年代の人が対応したことにすごいと思いました。実際、火災や地震が起きたとき、どんな行動をしたらいいのか考えていなかったけれど、避難所の話を聞けて、命を守るためにどこに逃げればいいのか分かりました。いつ起こるかわからない火災や地震に備えて、日頃から非常食の準備だったり、今回学ばせていただいた避難所の場所だったり、消火器の使い方だったり、学んだことを忘れないようにして、実際に起こった時に対応できるようにしたいです。
- 土石流というと、ゆっくり進んで来るもので、避けることができるようなイメージでいたけれど、実際はいつのまにかのみ込まれてしまうと知り、改めて自然災害の怖さを感じました。段ボールベッドは、知ってはいたけれど、思っていた以上に組み立てが簡単で、担架なども中学生でも十分に手助けができそうだと実際に体験してみて感じた。災害時には積極的に動いていきたいです。
- 台風の強さ等の情報を正しく得ることで、どんな危険性のある台風なのかを知り適切な避難ができることを知った。「釜石の奇跡」で、中学生が率先して避難したことで地域の人々が助かったという話を聞いた。指示通りに動くだけでなく、自分で考えて動きたいと思った。まずは、準備をして、しっかりと災害に備える。また、情報を集めて、状況に応じて動く。日頃から近所の人と交流をもって、いざという時に助け合えるようにしたい。
- 自分の命だけでなく地域みんなで協力していくために、普段の生活から地域との関わりを大切にしていきたいと思った。自分のことだけでなく、周りの人にも気を回せるようにしたい。

【学校防災支援アドバイザー 信州大学教育学部 本間喜子先生からの御指導】

- 学校の避難訓練に、自治体を始めとした様々な機関が関わっているのは珍しい。令和4年度の時と比べて、それぞれの地域での活動内容がグレードアップ・情報更新がなされている。実際に災害が起こったとき、中学生には何ができるのか具体的に知るよい機会になっている。
- 地震を想定した避難訓練の中で、机の下に隠れる生徒の姿があった。実際に地震が起こった際には机も揺れるので、机の脚を押さえる必要がある。地震が起きたときの様子を見せるなど、より本番を想定した訓練にできるとよい。

4 今後の課題 ～担当や職員が代わっても目的が失われないために～

令和4年度より再開された地域と連携した防災学習だが、再開以降、毎年企画者が代わっている上、立ち上げ当初の様子を知る職員や区長の方も少なくなってしまうている。立ち上げ時の目的や手順について、情報の共有と確認の重要性を改めて認識した。本活動の担当職員が「地域と連携した防災学習」の目的や手順を理解するとともに、まずは職員や地域の大人が、活動の趣旨を理解・共有することが大切であると感じている。また本活動には、区長の方を始めとした学校外の多くの方が関わっている。学校外の様々な方の視点は、この活動を「やらされる活動」にしないために重要であると考ええる。以下は、市危機管理課、地域コーディネーター、市教育委員会との振り返りで出された成果と課題である。

- いざというときに頼れる地域の大人の顔を知るという意味で、地域で働く大人へのインタビューは意味があったと言える。しかし、災害時「自分たち中学生に何ができるのか？」を考えてはいなかったのも、そこを今後考えていけると更によい。
- ARゴーグルを用いて浸水体験を行うなど、生徒に災害の危険性を伝えていくために地域の方が手を尽くしている。その一方で、地域によって活動への取り組みに温度差があるのも事実。ある程度のマニュアルがあってもよいのではないか。
- 地域の方も、子ども達に向けて教えるために自分たちも地域の防災について学習している。学校（生徒）と地域の方の双方にとってメリットのある活動だと言える。
- 防災訓練に参加する生徒の様子を見てみると、レクリエーションのような雰囲気を取り組んでいる姿も見られた。訓練である以上、本番を想定した心構えなどを事前に指導した方がよいと感じた。
- ふだん何気なく通っている道も、災害時は危険箇所になる可能性が十分にある。日頃から防災への意識付けが重要である。

5 まとめ

「安全意識は眠るもの」とよく言われる。特徴的な災害が想定されていない穂高東中学校区においては、生徒・大人ともに防災への意識が薄れてしまう可能性が考えられる。その中で、起こりうる災害や避難時にできることを考え、防災への意識を引き上げることでできる「地域と連携した防災学習」は、学校・地域の双方にとって大きな意味をもっていると考えている。

（文責 教諭 嶋崎大志）

学校安全総合支援事業の取組について

一 周辺河川の氾濫による浸水を想定した垂直避難訓練の実施について

安曇野市立三郷中学校

1 はじめに

本校は、安曇野市の南部、松本市と隣接する場所に位置する、全校生徒約 500 名の中学校である。西には北アルプスの山々がそびえ、南には梓川が流れる。そのため、学区は黒沢川の扇状地上の緩やかな傾斜地や梓川が形成した段丘地に広がっており、本校も、河川により形成された扇状地堆積物の上に立地している。

このような地に立地する本校は、令和 2 年度に改訂が行われた「安曇野市防災マップ」で、50cm の浸水が想定される区域内となった。主には前述の黒沢川の氾濫によるものが考えられるが、そのほか校地周辺には「堰」とよばれる用水路が多く、昨年度は雨天時に近くの用水路が詰まったため校地内に水が流れ込み、駐車場の職員の自動車のタイヤの下半分が浸かることも起こった。このため豪雨時など浸水が想定される際は、安全確保のために迅速な対応が求められる。

本校では、令和元年度から「学校安全総合支援事業」に加わり、学校アドバイザーとして信州大学教育学部教授 廣内大助先生を講師にお迎えし、助言を頂きながら避難訓練を実施するなどの取組を行ってきて 6 年目を迎えた。またこれまでの経過の中で、2 に示す「防災訓練 3 年計画」を策定した。

2 三郷中学校防災訓練 3 年計画

本校では、次の表の通り 3 年間のサイクルを策定し、防災訓練に取り組んでいる。今年度は策定して 3 年目を迎え、初めて水害を想定した訓練を行う年度であった。

	4 月	5 月	9 月初旬	10 月末
1 年目 R4,7,10,13	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 出火場所：調理室 登校時指導		シェイクアウト訓練(0.5h)	避難訓練(地震・火災)(1h) 授業中(告知なし) 放送機器故障 出火場所：第 1 理科室
2 年目 R5,8,11,14	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 防火扉閉め避難 出火場所：第 1 美術室	避難訓練(隔年 R5,7,9) シェイクアウト訓練 引き渡し訓練 小中合同	シェイクアウト訓練(0.5h)	避難訓練(地震・火災)(1h) 休み時間(告知なし) 怪我・行方不明あり 出火場所：技術室
3 年目 R6,9,12,15	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 出火場所：被服室 登校時指導		シェイクアウト訓練(0.5h) 避難所生活学習	避難訓練(水害)(1h) 校外避難場所へ避難

(表) 防災訓練 3 年計画 (令和 6 年度安曇野市立三郷中学校教育基本計画より)

3 垂直避難訓練の実際 令和6年10月23日(水)実施

(1) 災害の想定

「学校西側の黒沢川・安曇野排水路の水が氾濫、また、周辺用水路が詰まり校舎内が浸水」「浸水による障害で電気の使用、トイレの使用不可」の想定で訓練を行うこととした。垂直避難は最終手段となるため、まずは水平避難を考えていくことになるが、今回は初めての水害対応訓練ということで、水平避難については訓練の中での指導のみとし、「校舎1階が徒歩での避難が困難になる水がくるぶしの高さまで上がっている」との想定で垂直避難の訓練とした。

(2) 訓練の経過

段階	時間	行動	説明
校外機関への連絡 通報訓練	13:35	○通報訓練（教頭） 梓川消防署へ『訓練通報、訓練通報。こちらは安曇野市立三郷中学校です。付近の水路から冠水し、現在1階が50cm浸水』	・直接梓川消防署へ連絡する。119へはかけない。 ・浸水を確認したところで帰宅か垂直避難の判断をする。
事前指導	13:35	○防災係主任が放送で事前指導を行う。 ・命だけでなく、物も守る避難 ・下層の階では物資を棚上にあげるなどの準備が必要 ・慌てずに上の階へ避難する	・視聴覚係が協力。
避難指示	13:45	○垂直避難指示を出す（教頭） 「現在三郷中周辺で河川が氾濫し、三郷中学校も浸水。1階にいる生徒は全員2階以上の階へ避難せよ。三郷中学校に浸水。全員2階以上へ避難し、2階本部まで人員報告をせよ。」	・放送機器使用不可の想定、職員室から職員が走って伝達する。
避難開始	13:45	○1階にいる生徒は全員避難する。（3学年、特別支援学級、通級指導教室、適応指導教室、保健室） ○教科書やカバンなど、上げられる荷物は上げる。 ○副担任を中心に、保健室と職員室から物資の運び出しを行う。 ○2階以上にいる生徒は、荷物を上げる訓練を行い、カバンの準備をする。机を前に詰め床を広げる。 ○学年主任は優先的に学年のフロアへ行く。 ○本部設置（2階廊下） 【準備用具】 救護場所・担架（片桐）	・すぐに命に危険があるわけではないため、保護できる物品は保護することを考える。教室に置いていくが棚上に上げるもの…教科書、電子機器（1人1台端末） ・水が引くまで帰宅できず引き渡しまで学校待機になる。持って避難するもの…カバン、ジャージ、タオル、水筒、常備薬、ティッシュ

人員点呼		○点呼の基本…授業開始時の現在数と避難完了時の人数で確認する。 ○学級担任は人員確認をし、学年主任へ報告。「報告。□年□組、現在数□名全員避難完了。以上。」 ○学年主任は、教頭へ報告。「報告。□学年、欠席□名、現在数□名、避難完了。以上。」(異常がある場合はその旨を報告) ○学年副主任は、学年職員を確認し教頭へ報告。「報告。□学年、職員□名、避難完了。以上。」	・職員室からの持ち出し品…本部旗、トランジスタメガホン、防災無線、生徒名簿、出欠一覧ホワイトボード、引き渡しカード(教務主任・教頭) ・保健室からの持ち出し品…毛布(5月等梅雨の時期)、熱中症対策グッズ(8、9月)、保健調査票、救急箱、下段の保健関係書類、車いす ・生徒は着席して待機。
避難完了 教室復帰 一斉放送	14:05 14:10	○全校生徒の避難が完了したことを確認できたところで終了の指示。 ○一斉放送で指導 ・水平避難、垂直避難とは ・避難所生活について ・引渡しについて	一斉放送の参考資料 NHKそなえる防災：命に関わる！水の力と動き
感想記入	14:15		

(3) 考察

訓練は計画通りに行うことができ、大きな問題はなく、1階にいた生徒は上階へ落ち着いて避難することができた。また、2階・3階にいた生徒も、1階での訓練に準じて持ち物を棚の上にあげたり、机やいすを移動して居場所を確保したりすることができた。



しかし、今回は初めての水難対応訓練ということで垂直避難の訓練を行ったが、垂直避難は水難対応としては最終手段であると考えられる。このことから、3年後の次の訓練については、指定避難場所ではないが学校敷地より一段高い場所にある、近隣の文化公園体育館に移動し(水平避難)、保護者への引き渡しを想定した訓練等も必要であると思われる。

4 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 廣内大助先生の訓練事前指導 令和6年9月24日(火)

- ・大事な書類、物品等は日常から高い場所での保管を。
- ・避難時に持っていくものは、下校時に持ち帰るものと考えればよい。
- ・電気が使えない想定で訓練をしておけば間違いはない。浸水時はエアコンも使えなくなるし、トイレも流せなくなる。

- ・車いす使用の生徒について、車いすは上げる余裕があれば上げればよい。一刻を争う状況ではそういかない場合もある。
- ・物品の運搬や車いす運びなど、生徒にやらせて良い。訓練でもやっておけば何かの時に役立つものである。
- ・人員確認の仕方は、日常的に授業開始、授業中段階で現在数をきちんと管理し、避難先で確認しないと機能しない。教科担任など今その場にいる人が管理する必要がある。
- ・避難した後どうするのか、実際の災害ではどうするのかを考える必要がある。実際には保護者への引き渡しになる。それまでは学校の管理下である。
- ・避難所の物資は市民のためのものであり提供はできない。例えば入学時の負担で3年もつものを購入し、使わなければ卒業時に渡すようなことも考えられる。
- ・タイムラインの作成をぜひ行いたい。一次避難を考え、それを入れて考えておく必要がある。
- ・全体的には、ケースバイケースであり、正解はない。災害がおこる前に、事前の抜本的対策、非常持ち出し物の普段の管理場所など考えておきたい。

(2) 廣内大助先生の訓練事後指導 令和6年10月23日(水)

- ・予想したとおり、生徒はうまくやっていた。
- ・渡り廊下の扉は閉めること。水害ならではの、どこをどうするのかの考えが必要である。
- ・先生方の動きがどう統一されているかが大事。例えば、残留者の確認時に扉を開けるが、声をかけるだけか、中へ入るのかなど、チェックした場所をどうトレースする方法もその1つ。何をするか、だれが見ても同じようになっていることが必要。
- ・人数把握の方法もその延長である。学校の仕組みに合った方法を考え決められるとよい。
- ・学校の管理責任が問われる。細かいことにエラーが出ないように、職員側の動き、やるべきことを決めておきたい。また、こういう時に何をしなければならないのかを子どもに学んでもらう。そのために普段は何が必要なのかを考えていく。そのためにもタイムラインの準備が必要。



5 事業の成果及び今後の課題

本校では初の、浸水を想定した訓練であり、一から検討した計画及び実施であったため、すでに実施している他校の様子など、参考にさせていただいた。今後も継続して情報収集等を行い、廣内先生のご指摘にあるように、タイムラインの策定に努めていきたいと考える。

はじめに述べた3年計画はこれで一巡したが、3年間の訓練から共通する課題として、①行方不明者を出さないための職員の動きと人数把握のより良い方法を探る ②職員自身が訓練によって対応力を高める の二点が挙げられる。

本校では、通常学級で学習する生徒のほか、特別支援学級で学習する生徒、特別支援学級に在籍するが多くの学習を通常学級でしている生徒、適応指導を受けるため多様な学びの教室で過ごす生徒等、多様な学び方の生徒がいる。これらの生徒の把握を、有事に備え、日常からどのようにしていくか課題がある。また、依然として訓練は「生徒の訓練」であると



いう意識が根強く、例えばシェイクアウト訓練では職員は机にもぐらず生徒の様子を見ているようなところも見られた。3年計画の二巡目を迎える来年度以降、さらなる職員の防災意識の向上に向け、初めの3年間の訓練を精査し、防災訓練に取り組んでいきたい。

(文責 教諭 波場 雄司)

防災学習から考える社会と地域、自分のあり方について

—地域防災を自分ごととして考え、行動する—

白馬村立白馬中学校

1 はじめに

本校は自然豊かな山紫水明を誇る白馬村唯一の中学校である。西に雄大な白馬三山を仰ぎ、県内有数の豪雪地帯としても知られ、村内には多くのスキー場が点在する。地域の中央部を南北にフォッサマグナが走り、白馬連峰から流れ出す河川には南に平川、北に松川、東に姫川があり、浸水想定区域に想定されている。そこには10学級（うち特別支援学級3学級）、全校生徒235名が学んでいる。国際的なリゾート地でもあり、多様な生徒が学ぶ本校の教育理念、教育目標は次の通りである。



10年前の2014年11月22日、白馬村を震源としたマグニチュード6.7を観測した神城断層地震があった。甚大な被害であったにもかかわらず、死者0名だったことから「白馬の奇跡」と語り継がれている。

また、2023年12月16日、白馬村みそら野地区をおそった土砂災害が記憶に新しい。様々な気象条件と地質条件が重なり多くの家屋が被害に遭った。

いつ起こるかわからない災害や緊急時に、私たちはどう行動したら良いのか。日頃平穏に暮らしている私たちが、防災学習を通して主体的に考え、自分ごととして行動するためにはどうしたらよいのか、本年度の取組を振り返り、持続可能で明るい未来につなげていく。

2 本校の防災体制

(1) 白馬中学校と災害、防災学習

10 年前に起きたことの記憶を持つ生徒は少なく、当時を経験した学校職員もごくわずかである。神城断層地震という言葉や報道された内容を見聞きした経験はあるものの、それが防災教育に反映されてはいなかった。

(2) 防災安全教育の計画

月 1 回の点検項目に従った安全点検、年間 3 回の想定別避難訓練を実施している。

第 1 回避難訓練 4 月 「火災想定による教室からの避難、避難誘導、人員確認、
防災自営団の業務確認」

第 2 回避難訓練 9 月 「地震想定による授業中の避難、避難誘導、人員確認」

第 3 回避難訓練 11 月 「冬季の避難経路確認 通行不能場所の確認」

(3) 避難所としての役割

本校は指定緊急避難所として指定されており、地震、洪水、土砂災害、内水氾濫、火災時における避難に対応する。想定収容人数は 450 人である。食料備蓄は全校生徒、教職員の 2 食分が保管されており、寝具や簡易トイレ、非常用の水等は備蓄されていない。学校より 200m ほど東、6 m ほど低地には、指定避難所である「ウイング 2 1」があり、そこには寝具等の備蓄がある。

マニュアルはあっても、過去の災害経験に基づいた訓練や体験、学校が避難所となった場合の研修や訓練、生徒が避難者となった場合を想定しての学習は行われていない。

3 自分ごととしての防災学習への変容

(1) 支援者、協力者を得る

心の片隅にはあった神城断層地震。あれから 10 年を迎えることとなり、「災害時に私たちに何ができるのか？」の曖昧さが浮き彫りとなったのは、防災士であり、能登半島地震の復興に携わった尾形望氏から話である。そこから学校防災の認識の甘さについて痛感し、アドバイザーをはじめ、多くの方との出会いと学びが始まった。

ア 支援事業ネットワーク

信州大学 廣内大助教授 日本赤十字社長野県支部及びボランティア
長野県危機管理部危機管理防災課

イ 自治体のネットワーク

白馬村役場総務課、生涯学習スポーツ課 白馬村社会福祉協議会及び日本赤十字白馬支部 白馬村教育委員会

ウ 生徒がつないだ地域のネットワーク

北アルプス広域北部消防署 白馬村ケーブルテレビ 震災アーカイブサポーター
震災体験者 建築関係者 アウトドアショップ JR 東日本 日本郵便 敬称略

生徒の思いが人の心を動かし、より深い学びに結び付いた。防災アドバイザーである信州大学の廣内大助教授と学校長との願いの共有からはじまった今回の防災学習は、避難所体験をはじめ、教師が流れをつくる定型の学びから、学生と生徒がともに学び合い、行動する機会が必要であると考え、数回にわたり信州大学の学生が本校に出向いてくれた。

当初、8月30日に実施した避難所設営宿泊体験をもって共同学習は終了予定としていたが、生徒の学びの変容を感じた学生たちが「もっと一緒に学べることもある」という情熱にかられ、学校側も生徒の主体性をさらに伸ばすチャンスととらえ11月22日に実施された「神城断層から10年目のシンポジウム」まで延長された。

(2) まずやってみること

7月19日に派遣事業として日本赤十字社長野県支部の協力を得て「HUG体験」を2年生が行い、防災学習の扉を開けた。この時点で生徒は、なぜこの学習をしているのだろうという思いの生徒が多かった。



(3) 失敗を前提とした避難訓練

当初、実施日を公開した訓練を行う予定であったが、実施日を特定しない期間に変更し、日時については係のみ把握する状況にした。教員も生徒も想定外とともに学ぶこととなり、避難、人員掌握に時間を要した。「いるはず」の人員把握が「命を守る」人員把握へと意識の変化があった。誰かが考えたことを繰り返す訓練では得られない想定外の出来事からの学びは多かった。



(4) 「知って 考えて 行動できる生徒」の育成

ア 避難所災害体験ワークショップ

8月30日、日本赤十字社長野県支部、長野県危機管理防災課、北アルプス広域北部消防署、信州大学の協力を得て、2学年が避難所災害体験ワークショップを実施した。生徒は6つのブース（AR浸水体験、救命救急体験、地震体験、簡易トイレづくり、新聞紙防災グッズづくり、ホットタオル・足湯体験）から3つを選択して実体験するワークショップを行った。体験を通して、日常からの備えの大切さ、当たり前に行っている自分の常識を覆されたこと、身近なものを生かす工夫、他者との協働について学んだ。



イ 避難所設営宿泊体験

8月30日夕刻、村内の体育館に2学年希望者33名が集った。各々が家庭から防災バッグを持ち寄り、受付から食事、避難所内のルール作りや区割りなど、必要なことを自分たちが行い、実際に一夜を過ごすという体験を行った。そこに大人の参加はあったが、あくまでも補助的な役割として、主体は生徒に委ねられた。受付を村教委と信大生、食事づくりを村社会福祉協議会と赤十字白馬支部、物資用達を村総務課、学

校職員はあくまでも同じ避難者として参加をした。生徒は、避難人数や避難所の状況把握、物資の数や必要数、必要なルールや掲示、伝達方法の整理などを信大生のサポートを得ながら行った。ここでは、自助と公助が命を救う第一歩になることを学び、相手意識を持つことや、自分ごとに置き換えて考えて行動することの大切さを知り、大きく成長する場面となった。



ウ 出会い



全校防災教育特別授業として、ゲストティーチャーに気象予報士、防災士の越後友利果氏を迎え、気象から見る災害について知って考える機会を得た。前年12月に白馬村を襲った土砂災害。どんな時に発生しやすいのか、白馬村はどんな災害がどんな場所で起こる可能性があるのかについて、白馬村の天気図と日本、世界の気象を関連付けて話してくださった。

また、生徒は災害への対応や実際に体験した方から話を聞く機会を得たいと考え、村内各所に出向き、アウトドアグッズの活用法やジャッキアップの仕方を聞いたり、防災倉庫や神城断層地震に関する遺構等の見学をした。更に住宅の耐震構造、災害時の食事、避難所での生活、アーカイブの意味について話を聞くことを通して、より自分ごととして考えるようになった。



エ シンポジウムでの発表

11月22日、白馬村で行われた「神城断層地震から10年」シンポジウムに発表者として参加する機会を得た生徒は、学んだことをより多くの人にわかりやすく伝えたいという願いを持ち、防災学習プロジェクトチームを自主的に募集し結成した。当日の発表方法を考えるとともに、より多くの人に知ってもらうための広報をケーブルテレビや村広報誌、防災無線放送の協力を得て実施することにした。それ以外にもアーカイブの作成、展示を行った。



そして迎えた当日。自分が感じた最も伝えたいことを、演技や実演、スライドを活用して、自分の言葉で堂々と伝えた。この中で生徒は、学びを伝えるだけでなく、学びから得て感じたこと、考えてほしいことを聴衆に提案として問題提起する場面もあった。



【信州大学廣内大助教授からの御指導】

体験学習や発表を振り返りつつ、実際に白馬で10年前に発生した神城断層地震を軸としながら、新たな学びを深めて行くと良いと思う。今回、学生が関わったことは、学生自身がともに学ぶことを通して、今後災害・防災を学び深めていく際の大きな糧となる。それを学校に還元し、循環させていくことも必要で有り、大切なことの一つ。これからは公助、当事者意識をどう持つかが課題となってくる。

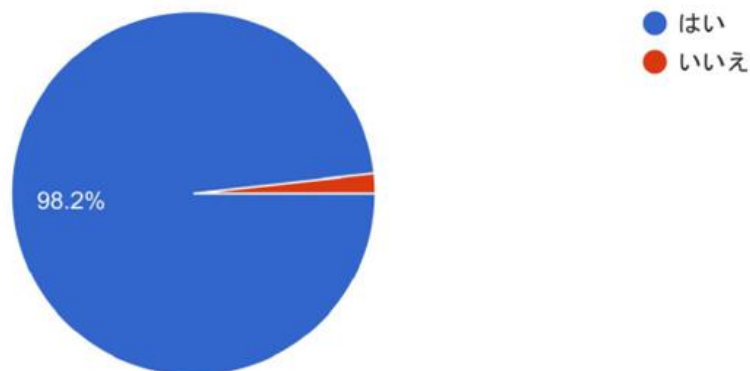
4 継続した学びとしての位置付け

防災学習は大切であるが特別な学びではなく、継続して行っていくことに大きな意味を感じている。今回改めて学び得たことに、防災教育の奥深さがある。それは、「いつ、どこで、どんな状況で」の予測が難しいことにある。

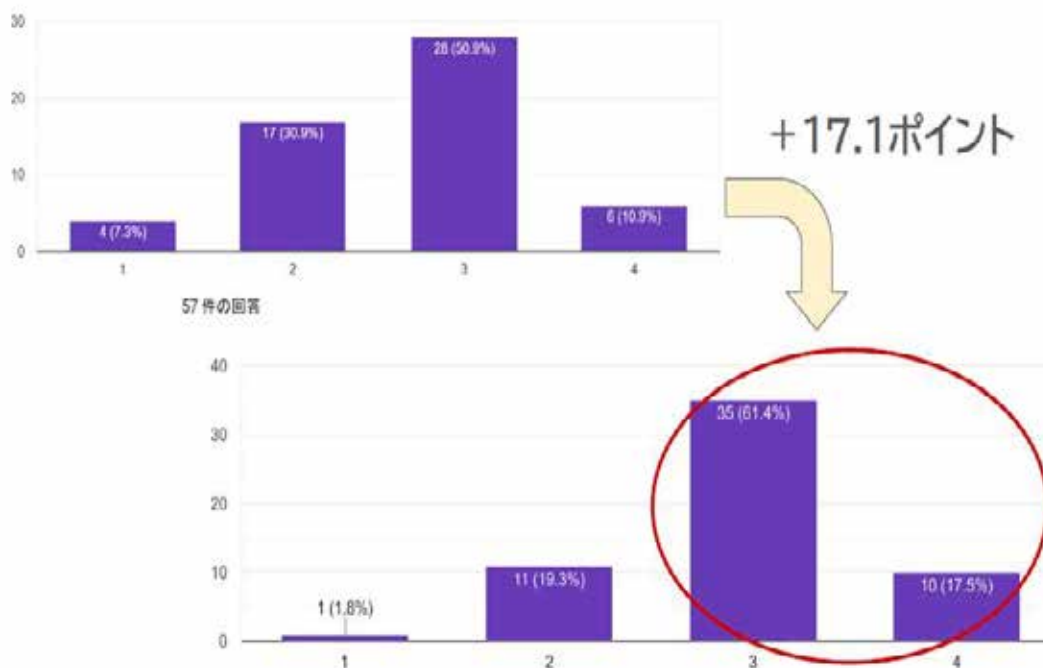
そして防災学習にはあらゆる学びや生き方を統合する要素があり、命の根源、地域の根源、社会の根源を学べる要素がある。そこには、自分の姿、地域の姿が映し出される。様々な関係者、自治体、近いようで遠い企業や団体の存在を知る、人のつながりをリアルに学べる要素に溢れている。また、そこには道徳性や人権感覚を多面的多角的に学べる要素も詰まっている。このことを意識して今後の学びに結びつけていきたい。

資料 生徒の防災学習前とシンポジウム発表後の変化、感想

今回の学習を通してあなたは白馬村の防災・減災まちづくりに貢献できると思いますか



あなたは、大きな災害が起きたときに、住民として対応できると思いますか



あなたは「災害を伝えていくこと」について、どのようなことを考えたり感じたりしましたか？

生まれた頃の災害なんて正直知らないし、どうでもよかった。けど今回の学習を通して自分たち中学生にできることがたくさんあるとわかった。自分ひとりではできないこともある。だからこそ協力が大事だと感じた。

昔にあった災害の記憶はどんどん薄れていってしまうから、どんどん色々な年代の人に伝えていくことがとても大切だなと思いました。そして、色々な人に災害のことを伝えることで、防災バッグを用意しようとか色々な人が防災・減災に取り組んでくれて、より多くの人の命を守れるようになるなと思いました。 (抜粋)



(文責 教頭 吉越 利充)

栄小学校における防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

栄村立栄小学校

1 はじめに

栄小学校は、千曲川と山々に囲まれた自然環境の中に立地する長野県最北端にある小学校である。冬に学校は雪に囲まれ、3mを超える積雪があり、校庭の雲梯やブランコが雪で埋もれてしまうほどである。

今年度は、48名の児童が、「ふるさとを愛し、心豊かに、かしこく、たくましい子」を学校目標に、学校生活を送っている。

本校は、14年前の東日本大震災の翌日に起きた、長野県北部地震を経験した学校である。また、長野県学校安全総合支援事業に参加し、日頃から防災意識を高め、自分の身は自分で守ろうとする力を育てることをめざし活動を進めている。

2 栄村立栄小学校の防災体制について（概要）

（1）第1回避難訓練 4月12日（金）2校時に実施

- ① ねらい 年度当初にあたり、災害（火災）発生時における基本的な避難の仕方や態度を身につける。
- ② 指導内容 ア. 雪のある時・ない時の避難経路の確認
イ. 緊急放送が聞こえた場合の対応
ウ. 火事や煙の恐ろしさについて
エ. 避難の仕方の確認
オ. 「お（おさない）は（はしらない）し（しゃべらない）も（もどらない）」の確認



（2）第2回避難訓練 9月3日（火）休み時間に実施

今年度は、地域・保護者の方の参加を募った。当日参加した地域・保護者は7名。

- ① ねらい 休み時間、地震が起きた際に、身を守る方法や避難の仕方を知る。
- ② 指導内容 ア. 合い言葉の確認・放送の聞き方・避難の仕方
イ. 緊急地震速報による避難
ウ. 避難場所の確認
- ③ その他 ア. 行方不明者あり（地域の方がトイレでけがをして動けない）という設定で訓練
イ. 職員の全係活動実施

(3) シェイクアウト訓練 9月9日(月)休み時間に実施

- ① ねらい 緊急地震速報が流れた際、その場にあった自分の身を守る行動がとれるようにする。
- ② 指導内容 ア.緊急地震速報が流れた瞬間に、自分の身を守る行動の確認
イ.教室以外の場所における安全な場所の確認
ウ.基本は「低く、頭を守り、動かない」
エ.避難時には防災頭巾を着用する
- ③ その他 ア.行方不明者ありの設定で訓練
イ.職員の全係活動実施



(4) 保小中合同引渡し訓練 10月25日(金)下校時に実施(15:30~16:30)

昨年度の反省を生かし、中学校→上の学年の児童から引き渡した。その後保育園での引渡しを行った。

- ① ねらい ア.非常時に、安全かつ確実に児童の引渡しをできるようにする。
イ.緊急連絡網「オクレンジャー」が機能することの確認を行う。
- ② 指導内容 ア.引渡しの連絡
イ.引渡し場所への移動
ウ.引渡し場所での待ち方
エ.引渡しの方法
オ.保育園や中学校との連絡、連携



保護者到着 15:35~引渡し終了 16:33

(5) 第3回避難訓練 1月10日(金)2時間目に実施予定

- ① ねらい 積雪時における避難方法や避難場所を知る。
- ② 指導内容 ア.雪があるときの避難経路・避難場所の確認
イ.合い言葉の確認・放送の聞き方・避難の仕方
- ③ その他 ア.二次避難場所(北信保育園)への移動

(6) 長野県北部地震の話 3月12日(水)朝の時間に実施予定

- ① ねらい 長野県北部地震経験者から震災の話を聞く。
- ② 指導内容 ア.震災当時の状況
イ.震災後の村づくり

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 本校の課題として、過去の震災の記憶が曖昧になり、危機意識が薄れている。「まさか来るとは…」ではなく、「やはり来たか…」の意識で災害への心構えをどう育てていくかを考えたい。そこで、今年度も地震時の避難訓練の工夫等についてアドバイスをいただきたいと考えた。今年度も昨年度に引き続き、信州大学廣内大介先生より、訓練の計画から振り返りまで指導を受けた。

(2) 第2回避難訓練のアドバイス（9月3日(火)）

- ①校庭で遊んでいた児童がわざわざ校舎に戻ってこようとした。そのまま座って放送を聞き避難行動に移せるとよい。
- ②体育館に避難する場合は体育館の安全なところへ。
- ③校内を点検する先生の手順や方法を統一する。
声をかける→戸を開けて目視・部屋に入る（トイレ等死角の確認）→発見したら大声で知らせる（どこで・だれを(何人)・救助に何人必要か・本部に知らせる・または誰かに託す)
- ④緊急時、保護者の車など誘導する職員がいない、対応できないときのために、矢印などの表示で誘導できるようにしておく。
- ⑤訓練の内容や方法をいくつかパターンで考えローテーションする。(形骸化しない)

(3) 保小中合同引渡し訓練のアドバイス（10月25日(金)）

- ①小学校児童・中学校生徒の引渡しカード・引き渡しリストを統一する。
- ②4月に「ここで引き渡す」というアナウンスをし、保護者に周知できるように。
- ③悪天候でも引き渡しができるような仕組み（場所設定も含め）をつくる。
- ④職員の人手が割けない状況も考えられる。駐車場の案内、校内経路など矢印で表示するとよい。
- ⑤最悪な気象を想定し、安全に引渡しができるよう計画を立てる。(ハザードマップで確認)
- ⑥オクレンジャーの文面を検討する。('この橋が落ちて通行止め」「この道は土砂崩れの危険性があるから迂回して」など) 同時に「どの道が安全か」「ここを通過して」も示すとよい。
- ⑦学校も役場土木課に確認し、村内の道について土砂崩れ等の情報を把握し、適切に保護者に知らせる。
- ⑧保小中で「引き渡すか否か」を合同で決める。危険な地域は引渡しを行わない判断をする。

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 成果

今年度も学校防災アドバイザーよりアドバイスをいただき、これまでの指導と合わせ、訓練について計画を立てることができた。保育園や中学校との統一した引渡し体制が構築されてきている。

(2) 課題

実際避難訓練を行ってみると訓練の方法や内容について、さらに検討したり新たな内容や方法を考えたりしていく必要があると感じる。

ハザードマップを活用した避難経路の再確認や自治体との防災訓練についての共有、会議を計画する必要も感じる。児童及び職員の命をしっかりと守れるように、よりよい方法を検討し改善していく。

5 まとめ

学校防災アドバイザーに来ていただき大変意義があった。これからも外部、地域の方に来ていただいて助言をいただきながら、学校の安全防災について考え、さらに効果的な訓練を目指していきたい。

(文責 教頭 神田 由美子)

学校安全総合支援事業の取組について

— 地域防災力を高める小中統合校の防災教育 —

栄村立栄中学校

1 はじめに

長野県北部地域では地震や豪雪などの自然災害への備えが重要であり、地域住民と学校が一体となって防災意識を高める必要がある。本校は長野県学校安全総合支援事業に参加し、災害時の情報共有や連携強化を目的とした活動を進めている。今年度も地域特有の課題に即した防災訓練を実施し、「封筒訓練」と「引渡し訓練」を通じて、生徒・保護者・教職員が災害時に冷静かつ迅速に対応できる力を育んだ。本報告書では、本校の防災体制、訓練内容、アドバイザーの助言、成果と課題を通じて地域の防災力向上への貢献を示す。



2 栄中学校の防災体制

本校は、地震や豪雪に備える独自の防災体制を整備しており、学校全体で「地域の防災拠点」としての機能を目指している。

(1) 学校施設の耐震性と備蓄品の充実

校舎は耐震補強済みで、大規模地震にも対応可能な設計となっている。保健室には医療品、屋根裏倉庫には飲料水や非常食、防寒具が備蓄され、災害時には避難所として地域住民に開放される。

(2) 防災教育の推進

年間を通じた防災教育を実施し、生徒が「自ら考え、行動する力」を身につけることを目指している。これには、危険察知能力やリーダーシップの育成も含まれる。

(3) 教職員の役割分担と研修

校長が指揮を執り、教頭が本部を統括、担任が生徒を指導する役割分担が明確である。災害対応研修を年数回実施し、迅速かつ適切な対応が可能な体制を維持している。

3 避難訓練における2つの取組

(1) 落ち着いて判断・行動するための「封筒訓練」

ア 目的と背景

封筒訓練は、生徒や教職員が災害時に冷静な判断と迅速な行動を取れるようになることを目的として実施された。過去の訓練で課題となった情報伝達の遅れを解消するため、教室内の状況を迅速に報告し、本部の指示をスムーズに伝える方法を模索する

中で行われた。

イ 訓練の流れ

訓練は地震発生を想定したアナウンスで始まり、生徒は机の下に隠れる行動を取った。その後、担任が封筒を開封し、教室内の状況を模擬的に示すカード（赤・黄・緑・無色）を確認して副担任に報告。副担任が本部へ情報を伝え、本部の指示を教室へ返す形で進行した。これにより、情報共有と全体像の把握が円滑に進む体制を実践した。

ウ 参加者の声

訓練中、ある教室では「赤」のカードが封筒から出され、生徒の重傷を想定したシナリオが進行した。この場面では、担任が即座に副担任を呼び、本部への報告を指示。同時に他の生徒に「落ち着いて待機するように」と声をかける等、教室全体が冷静に対応する姿が見られた。本部への報告後、応急処置班が担架を持参して教室に向かい、重傷者を保健室へ搬送する流れが円滑に進行した。



また、生徒たちの中には「パニックになった友達を落ち着かせようとした」という振り返りをする者もいた。具体的には、『大丈夫だよ』と言葉をかけた」「自分も怖かったけれど、友達に安心するよう伝えた」という内容が挙げられた。このような行動は、訓練を通じて生徒が災害時の自分の役割を意識するきっかけとなった。

エ 成果と課題

訓練を通じて、生徒と教職員の連携が強化され、生徒が主体的に行動する姿勢が見られた。本部では教室の状況を色別に整理し、全体像の把握が容易になった点が評価された。一方で、副担任が本部報告中に担任だけでは対応が不十分になることや、欠席者情報が反映されないなどの課題が明らかになった。

オ 改善案と今後の展望

今回は副担任が他教室の状況を共有する役割を追加し、報告と指導のバランスを改善する。また、欠席者情報の反映を徹底し、正確な全体把握を目指す。この学びを活かし、生徒の判断力と行動力をさらに向上させ、地域全体の防災力向上に貢献していく予定である。

(2) 保育園、小学校とも連携した「引渡し訓練」

ア 目的と背景

引渡し訓練は、生徒の安全を最優先に、保護者への迅速かつ正確な引渡しを目的として実施された。今年度は保育園や小学校と連携し、地域全体で統一的な防災行動を取る体制の構築に重点を置いた。この取組は、兄弟姉妹が異なる教育機関に所属している家庭への対応を想定したものである。

イ 訓練の流れ

引渡し訓練は、封筒訓練終了後に実施。生徒は担任の指示で荷物をまとめ、北側駐車場の引渡し場所へ移動した。保護者は引渡しカードを記入後、担任が保護者を確認

して引渡しを行った。引渡し場所は保育園や小学校の近くに設置され、保護者が複数施設を訪問しやすい動線を考慮した。

ウ 参加者の声

複数子どもを引渡し場所で受け取る家庭が多く見られ、動線設計が好評を得た。また、職員が記入例を示したことで引渡しカードの手続きがスムーズに進行。生徒からは「指示通りに動いて引渡し場所に行くことで安心した」や「引渡しを待っている間、友達と話すことで落ち着いて過ごせた」という声が聞かれた。また、保育園の園児を迎えに行った保護者からは、「園児と生徒がそれぞれ安全に待機していたことが安心材料になった」との意見も寄せられた。



エ 成果と課題

成果として、教育機関間の連携が取れ、保護者の負担が軽減されたことや、動線設計と引渡しカードの利用が訓練のスムーズな進行に寄与した。一方で、以下の課題が浮上した。

- ・引渡し場所が屋外で天候の影響を受けやすい。
- ・職員が担う車両誘導の効率性に課題があった。特に終了時の混雑が問題となった。

オ 改善案と今後の展望

今回は以下の改善策を講じる予定である。

- ・屋根付きエリアに引渡し場所を変更し、天候の影響を軽減。
- ・看板や矢印を活用して車両誘導を効率化し、職員の負担を軽減。
- ・動線と手順を事前に保護者へ周知。

これらを基に、保育園・小学校との連携をさらに深め、災害時における円滑な引渡し体制の構築を進める。

4 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 専門的な助言と実践的な指導

信州大学の榊原先生から、訓練の計画から振り返りまで一貫した指導を受けた。防災専門家として、地域特性や防災体制を分析し、次のような実践的助言を提供した。

ア 情報伝達の効率化

封筒訓練での情報共有方法に、停電時を想定した改善案が提示された。拡声器やメッセージボードの活用で、停電時にも正確な情報伝達を実現する方針が示された。

イ 現実的なシナリオ設定

軽微な被害に限らない現実的なシナリオを訓練に組み込む必要性が指摘された。これにより、より実践的な対応力の向上が期待される。

ウ 地域防災の連携強化

保育園や小学校と災害時の動線を統一するためのハザードマップ共有や、保護者向

け情報アプリの導入を提案。これにより、リアルタイムで状況を共有する仕組みの構築が進められた。

(2) 振り返りと次年度への展望

振り返り会議では、「予期せぬ事態を想定に含めることで柔軟な対応力が養われる」との指摘を受け、本校は次年度に、より実践的な訓練を計画している。

5 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業を通じて得られた成果

ア 防災意識の向上

生徒が具体的に行動を考えるきっかけとなり、「自分たちで安全を守る意識」が育まれた。

イ 教職員の役割分担の明確化

教頭が指揮を執る体制や、副担任が本部連絡を担う流れが円滑に機能した。

ウ 地域連携の強化

保育園や小学校との統一的な引渡し体制が構築され、保護者の負担軽減につながった。

(2) 今後の課題と改善案

ア 情報共有の迅速化

停電時でも対応可能なメッセージボードや拡声器を導入し情報伝達の多層化を図る。

イ 天候対応の強化

屋外引渡し場所を屋根付きエリアに変更し、悪天候時の課題を解決する。

ウ 実践的なシナリオの導入

けが人の増加や避難途中の危険を想定したシナリオを組み込み、柔軟な対応力を養う。

エ 地域全体の防災計画の見直し

ハザードマップを活用した避難経路の再確認や、自治体との防災会議の開催を計画している。

(3) まとめ

今年度の取組を通じ、地域防災の中核としての役割を強化できた一方、天候対応や実践的なシナリオ設定などの課題が残された。次年度はこれらに取り組み、さらに効果的な訓練を目指す。

(文責 教頭 田中 新一)

中野市立高社小学校における防災・安全教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

中野市立高社小学校

1 はじめに

中野市立高社小学校は、令和2年4月に長丘小学校、平岡小学校、科野小学校、倭小学校の4つの小学校が統合されてできた学校である。校区は、中野市北部の高社山の麓に位置し、周囲はなだらかな傾斜地で水はけがよく、果樹栽培が盛んな地域である。また、統合のために校区が非常に広く、全校の約3割がスクールバスで通学をしている。校舎は旧平岡小学校を使い、統合により在籍者数が1.6倍になった児童のために学校敷地を整備し直し、校舎を増改築している。校章は、統合した4校を四葉のクローバーとして表現し、中野市のシンボルでもある高社山が簡略化して描かれている。また、「広く 高く 豊かに～ふるさとの山 高社山のように～」を学校目標として、地域に根ざした教育を進めている。開校当初は4つの小学校それぞれの特色を取り入れた教育課程を編成して教育活動を行ってきたが、開校して5年目となり、高社小学校独自の教育活動が少しずつ生まれてきている。

令和6年度の学級編成は、各学年2学級とひまわり（知障）学級、わかくさ（自情障）学級、あおぞら（自情障）学級の全校15（3）学級で、児童数は373（21）名である。

2 中野市立高社小学校の防災・安全教育について（概要）

(1) 第1回避難訓練 4月12日（金）実施

ア ねらい＜火災想定＞

- ・非常時における避難経路および避難方法を知る。
- ・児童が、防火扉の通り方を体験する。
- ・職員が、ヘルメット・ホイッスルを着用した誘導の確認をする。

イ 指導内容

- ・児童及び職員の避難技術の向上を図る。
- ・児童が、避難に臨む態度を学ぶ。

(2) 交通安全教室 5月1日（水）実施

ア ねらい

- ・交通安全への関心と意識の醸成をする。

イ 指導内容

- ・児童が、実際の車両（トラック）を使用した死角、内輪差の体験をする。
- ・児童が、衝突実験を通して、交通事故の怖さを学ぶ。



(3) 集団下校訓練 5月7日(火) 実施

ア ねらい

- ・緊急時に落ち着いて集団で下校する方法を知る。

イ 指導内容

- ・職員が、地区別の人員点呼および下校班引率の仕方の確認をする。
- ・児童が、地区別での下校の仕方を確認する。

(4) 不審者対応・防犯訓練 6月12日(水) 実施

ア ねらい

- ・職員が、不審者から児童を守る方法を知る。
- ・児童が、不審者に遭遇したときの身の守り方を知る。

イ 指導内容

- ・職員が、不審者から児童を守るための方法を確認する。
- ・職員及び児童が、不審者が校内に侵入したときの避難方法の確認をする。
- ・児童が、校外で不審者に遭遇したときの対応の確認をする。



(5) 職員研修(不審者対応講習) 6月12日(水) 実施

ア ねらい

- ・警察署の方と不審者対応・防犯訓練を振り返り、対応の技術向上を図る。

イ 指導内容

- ・職員が、不審者との対峙の仕方を学ぶ。

(6) 職員研修(救命講習) 6月12日(水) 実施

ア ねらい

- ・消防署の方から、水泳の授業等での緊急時の心肺蘇生法(含 AEDの使用)を学ぶ。

イ 指導内容

- ・職員が、授業場面を想定し、連携して行う救急救命方法の確認をする。



(7) 引渡し訓練 6月14日(金) 高社中学校と合同実施 ※アドバイザー派遣有り

ア ねらい

- ・児童の安全かつ確実な保護者への引渡し方法を確認する。

イ 指導内容

- ・職員が、保護者等への児童の引渡し方法の確認をする。
- ・保護者等が、学校へ来校し児童を引き取る方法を確認する。



(8) 自転車教室(3・4年) 6月20日(木) 実施

ア ねらい

- ・交通安全に必要な運転技能の習得をする。
- ・交通事故防止のための安全な道路利用方法を知る。

イ 指導内容

- ・児童が、歩行および自転車での通行練習を通して、交通法規を確認する。



(9) 第2回避難訓練 9月3日(火)実施

ア ねらい

- ・休み時間での地震発生時の避難の仕方を学ぶ。(児童への事前通知なし)

イ 指導内容

- ・職員が、緊急時の児童の避難の対応について確認する。
- ・職員が、不明児童が出た場合の対応を確認する。
- ・児童が、教師の指示がない中で自分の身を守るための避難方法を確認する。

(10) 第3回避難訓練 11月21日(木)実施 ※アドバイザー派遣有り

ア ねらい

- ・地震の被害により放送設備が故障したときの避難方法を確認する。

イ 指導内容

- ・職員が、不明児童を出さないための避難方法について確認する。
- ・児童が、教師の指示により安全に避難する方法を確認する。

3 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 引渡し訓練について

- ・有事の際に、保護者から学校へ問い合わせの連絡が殺到しないように、事前に保護者との約束事を決めておくことよい。例えば、「中野市が震度5強以上の地震に見舞われた場合は、学校から連絡がなくても引渡しの措置をとる」など。ただし、この基準については市教委と相談し、市内の小中学校の足並みがそろうようにしたい。
- ・帰宅困難児童が出る可能性がある。あらかじめ、有事の際には何分程で迎えに来られるか、保護者に確認しておくことも必要である。また、帰宅困難児童の学校での対応を考えておきたい。
- ・一方通行となっている駐車場で、体育館側の出口から出ずに、入口(校門)の方に逆走している車があった。椅子などに進行方向の矢印を付けたものを用意しておき、有事の際にはその矢印を掲示するようにしておけば、職員が外に出て駐車場の案内をしなくても済む。
- ・有事の際は下駄箱でゆっくりと靴に履き替えている暇はない。訓練のときから上履きで下校するなどといった素早い行動を心掛けられるようにしたい。
- ・地震などの際には、手の空いた職員から様々に対応していかなければならない事項が



多数発生する。そのため、一人ひとりに役割を分担するのではなく、「手が空いた職員から、これをする」といった全体の流れを作っておく必要がある。

- ・訓練について、子どもが「校内にいる」とき、「登下校」のとき、「休日」のときというように、場面を広げて考え、訓練を実施していけるとよい。

(2) 第3回避難訓練（地震想定）について

- ・緊急の放送が入ったときには、まずは、その場または安全な場所に止まることが大切である。揺れている場面で、走って教室に戻る児童の姿があった。地震では、揺れているときが一番危ないため、廊下等で地震が起きたときに待機できる安全な場所にイラスト入りの掲示をしておくとうい。
- ・避難経路について、決められてはいるが被害状況によって合理的に判断して避難できるようになるとよい。避難経路の定着のために、視覚的な掲示をするとともに、朝の学級活動の時間など短時間でいいので、避難の練習を繰り返し行いたい。
- ・避難経路の安全性を高めるために、窓等はアクリル製のものや飛散防止のガラスにしていきたい。予算等の課題もあるので、ガラスについては優先順を決めて飛散防止のフィルムを貼っていくことで対応を進めるとよい。
- ・職員の巡視について、校内で避難できていない児童を取りこぼさないように、どう巡視するのかを考えておきたい。ある職員が、トイレ内の個室まで見て確認する姿があり、よかった。どの職員でも同じように巡視できるように、「どこを、どう見るのか・何を見るのか」といった手順を決めておく必要がある。また、扉に「巡視したことを示す印をかいいて扉を閉めておく」ことで、不明者が出た際に捜索に入る消防士が参考にできる。
- ・地震で外へ避難した後に校内へ戻るときは、建物の危険度判定を受ける必要がある。しかし、緊急時には判定を受けるための時間的な余裕がないため、安全確認のチェック項目を準備しておき、チェック項目で安全確認ができれば屋内退避が可能である。

4 事業の成果及び今後の課題

本校の防災・安全教育について、廣内先生から指導いただいたことで、開校して5年目となる本校の課題だけでなく、よさを再確認し、よりよい防災・安全教育について係を中心に再検討する機会となった。いくつかの課題が残されているが、今年度の実践をもとに、来年度以降の保護者や地域、高社中学校と連携した防災・安全教育の在り方をさらに考えていきたい。

(文責 教頭 荻原 啓一)

中野市立高社中学校における学校安全総合支援事業の取組について

一 小中合同引渡し訓練とトリアージを含めた安全確認訓練

中野市立高社中学校

1 はじめに

本校は、中野市の北部で高社山のふもとに位置する。全校生徒 206 名の中学校である。西には千曲川、東には夜間瀬川などの大きな河川に近い土地である。千曲川の浸水想定区域ではないが、夜間瀬川の浸水想定区域になっている。

2 中野市立高社中学校の防災体制について

昨年度、信州大学 廣内先生の指導のもと、初めて引渡し訓練を行い多くの課題が明確になった。また同じく初めて大地震を想定した校舎内避難訓練を実施し、更にトリアージを含めた生徒の安全確認訓練を実施したいと考えて本年度取り組んだ。

また市内中学校においては引き渡し訓練を行っている学校は本校だけであり、他校のモデルになる可能性がある。また市内小中学校において大地震を想定した校舎内避難訓練を実施している学校もなく、市内の小中学校のモデルになる可能性は高いと考える。

3 高社小中学校合同引渡し訓練

(1) 小中での連携と対応

令和 6 年 6 月 14 日 (金) に高社小学校と高社中学校が合同で引渡し訓練を実施した。昨年度の廣内先生の指導により、高学年から低学年の順に引渡した方がよいということで、兄弟姉妹関係がいる保護者は中学校から小学校へ移動できる日程にした。また、5 月 29 日 (水) に小中の校長、教頭、担当で事前打合せをし、連携を図った。

小中学校それぞれで下の表のように対応した。

	高社小学校	高社中学校
メール配信	15 : 35 1、2 年生 15 : 50 3、4 年生 16 : 05 5、6 年生	14 : 30
引渡し時間	15 : 35～16 : 20	15 : 00～16 : 00

(2) 引渡しカード

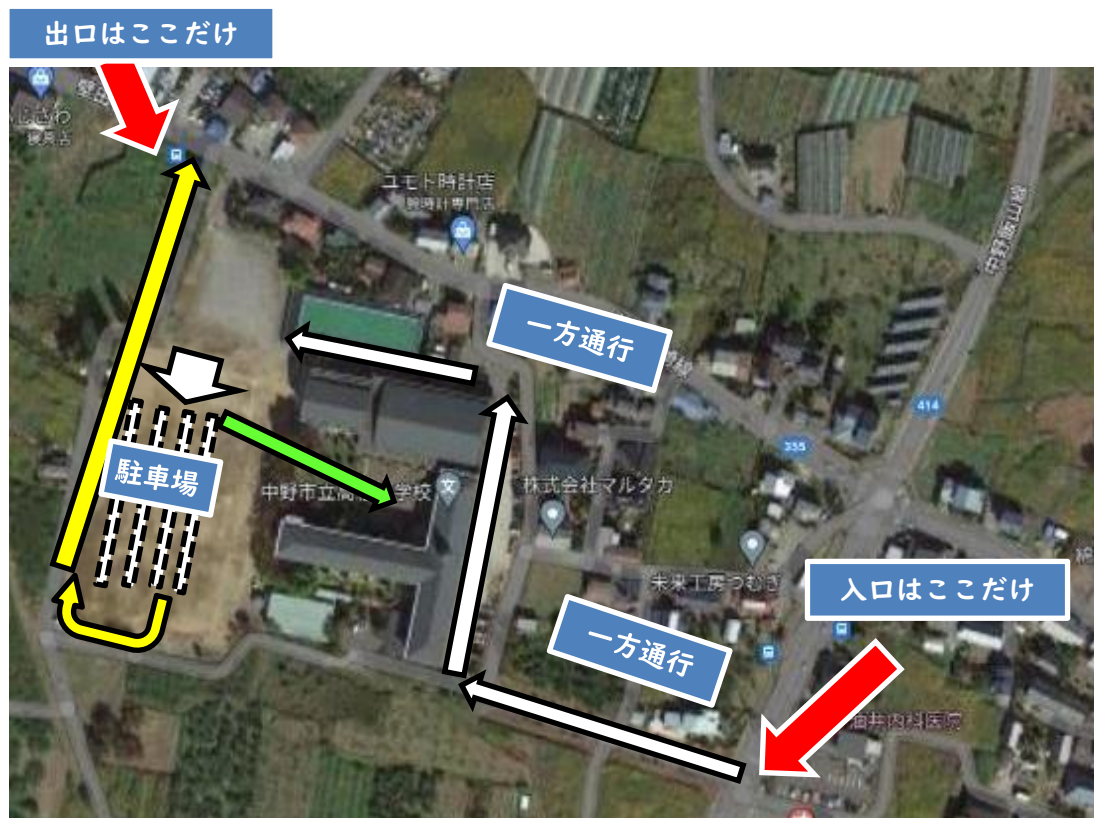
右図のようなカードを事前に保護者に記入していただき、常時携帯できるようにカードサイズにして保護者に返却した。

緊急時引渡しカード			
 中野市立高社中学校			
姓	名	組	番
氏 名		性別	
住 所			
保 護 者 名		続柄	
電 話 番 号			
きょうだい関係		令和 年度入学 組 名前	
		令和 年度入学 組 名前	

緊急連絡先	名称	住所	電話番号
引き取り手 <td></td> <td></td> <td></td>			
続柄			電話番号
①			
②			
③			
④			

(3) 駐車場へのルート

緊急時を想定したので、校内へは土足のまま入っていただいた。また校地内は徐行で誘導矢印に沿って進んでいただき、生徒引き取りの自動車入口・出口は一か所のみとした。



(4) 当日の様子



教室で受付



案内看板のみ



駐車の様子

(5) 考察

訓練自体はスムーズに進み、大きな問題はなく生徒を家人に引渡しすることができた。できるだけ少人数で引渡しができるように、矢印で誘導するなど工夫をした。

いくつか課題も見つかった。①一方通行としてあったが、駐車場で逆走する車などがあった。矢印を増やして進行方向を明確にする必要がある。②残りの生徒の人数が少なくなってきた段階で、全生徒を1階に移動させたが、その際に連携ミスで保護者が2階、3階へと上がってしまうことがあった。トランシーバーなどで連絡を取り、生徒の移動中は保護者を1階に留めておく必要がある。

4 教室内待機訓練（トリアージ含む）

令和6年9月2日（月）に教室内待機訓練を実施した。

(1) 教室内訓練前の指導内容

大地震では教室内待機による避難になる事が予想される。

- ・けが人等校庭への避難が困難な生徒が多発する
- ・外へ避難しても、校庭が液状化するなど、悪天候（寒さ・暑さ）により二次被害の心配がある
- ・耐震化された学校の崩壊は皆無である
- ・大地震は必ず余震を伴う
- ・停電により情報共有、指示伝達が困難になる
- ・同時多発に出た傷病者対応が困難になる

ア トリアージ：けが人の見極めと搬送順位を生徒に説明する。

この事を確認しておかないと保健室に最も軽症の生徒から集まり、結果的に緊急性のある生徒が、最後に保健室に搬送されることになり、応急処置が遅れる心配がある。けが人等が同時多発することが予想されるので、保健室への搬送は重症な生徒を優先する事を理解する。

(ア)（緑：搬送順位3）歩けるか歩けないかで判断【歩ける生徒】

(イ)（黄：搬送順位2）歩けない生徒で、呼吸・脈・意識がある【歩けない生徒】

(ウ)（赤：搬送順位1）歩けない生徒で、呼吸なし・脈なし・意識なしのうち一つでも該当する【重症の生徒】

イ 余震対応

大地震の後には必ず大きな余震があるので、揺れたら机の下に隠れ机の脚を握るよう、生徒に指導する。緊急地震速報を何回か鳴らすので、そのたびに身を守る行動をとるようにする。

ウ 停電対応

大地震が起きるとほとんどの場合停電になる。そのため揺れがおさまったら、生徒は机の下から出て担任にケガの状況を色で報告する。担任は状況確認を行い、報告をまとめて、情報収集に来た先生に伝える。

(2) 実際の様子



本部



けが人運搬 1



保健室の様子

(3) 考察

怪我人を送り出した側に「無事に保健室に着いた」という報告をする必要があった。また、今回はトリアージの色と人数だけの報告だったが、実際に地震が起こった際には、余震等で保健室にたどり着けなかった時に、該当者が誰だかわからないと救助に行くことが難しいと感じた。

報告が1学年からになっていたが、伝達職員が保健室前から移動することを考えると1階の3学年からの方がよいということで、途中で変更をした。搬送指示が校長→教頭→担当職員となっていたが、校長先生の搬送指示でそのまま担当職員に伝わるので、できるだけ簡素化・迅速化することを考えると校長→担当職員でよい。

重傷者が保健室に運ばれてきた後の対応（保護者連絡、消防本部への連絡など）も訓練と併せて今後考えていきたい。

5 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学校防災アドバイザー内山琴絵先生と廣内大助先生による学校訪問時の御指導

令和6年6月14日（金）実施の引き渡し訓練で指導をしていただいた。

実施前に内山先生と廣内先生には中学校で打合せをしていただき、その後廣内先生は小学校へ移動し小学校の指導へと移った。

- ・メール受信から学校までどれくらい時間がかかるかアンケートをとっておくとよい。
- ・帰宅困難になる場合があるので、親にどうしてほしいか希望を聞いておく。
- ・小学校との兄弟関係を調べておく。
- ・今回は強盗事件の設定なので、1階の窓は閉めておく。犯人を紛れ込ませないためにもチェックを真剣に行う。

(2) 学校防災アドバイザー内山琴絵先生による学校訪問時の御指導

令和6年9月2日（月）に実施した避難訓練（トリアージ含む）の事後指導を依頼し、9月20日（金）にお越しいただいた。

当日の訓練の映像等を観ていただき、指導をしていただいた。

- ・保健室までの導線の確認が必要。
- ・判断できることがトリアージ。危険が伴うので運ぶことが目的ではない。
- ・トリアージ確認のルールは統一して確認しておく。
- ・家庭科室等机の下にもぐれない時は安全地帯に集まる。

6 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業の成果

内山先生には、専門家としての御意見を伺うことで、防災教育を見直す機会をいただいている。昨年度明らかになった改善点が改善され、新たな課題も明確になってきた。実際に訓練をしてみないとわからないこともたくさんあり、マニュアルをつくるだけではなく、様々な訓練を行うことが大切だと改めて感じる事ができた。また、職員の対応力や意識を高めることができ、防災意識を向上させることにもつながった。

(2) 今後の課題

様々な訓練が必要とのことで、3年間のサイクルでローテーションを組んで一通り訓練ができるような計画を立案していこうと考えている。

（文責 教頭 宮崎 隆）